



©Makoto Kamiya



©Seiji Okumiya

## 第206回定期演奏会「イギリスの色彩」

2024年9月28日(土) 13:45開場 14:30開演 [14:10～指揮者プレトーク]

愛知県芸術劇場 コンサートホール

指揮/角田鋼亮(音楽監督) チェロ/上野通明\*

ヴォーン・ウィリアムズ(グリーヴス編):「グリーンズスリーブス」による幻想曲

ウォルトン:チェロ協奏曲\*

アーサー・ブリス:色彩交響曲

チェコの香りをお楽しみいただいている本日に続いて、夏の盛りを挟んでの次回・第206回定期演奏会(9月28日)のテーマは《イギリスの色彩》。指揮台に立つのは我がマエストロ・角田鋼亮音楽監督です。

冴えて深い表現力で世界に羽ばたく若き俊才チェリスト・上野通明さんをお迎えして、ウォルトンのチェロ協奏曲(傑作!)が演奏されるのはぜひお聴きいただきたいですし、ブリス《色彩交響曲》は、4つの楽章に色のイメージを冠したとてもユニークな作品。巧みに書き込まれながらも聴きやすく、その表現の幅広さに若々しいチャレンジ精神もみなぎる大作……これこそオーケストラの《色彩》を全身に浴びていただきたいプログラムです。

### ◆遙かな昔から、想いは変わらず……

ところで、イギリスといえば——マエストロ角田とセントラル愛知響は、年に一度のペースで『ハイドンのロンドン精神』という演奏会シリーズをお届けしています(次回・Vol.5は今年の12月6日です)。

この企画を通して、18世紀末のロンドンっ子たちが(大陸から到来した、最新のオーケストラ作品)を熱狂的に受け入れた昂奮を追体験しているわけですが……逆に、イギリス人による(国際的なレベルの)オーケストラ作品があらわれるのは、20世紀初頭に才能を開花させたエルガーあたりからとなります。

そのエルガーに続いて、イギリス音楽に豊かな実りをもたらしたのが、たとえば自然の色彩を深呼吸するようなオーケストラ曲を数々残したディーリアス、組曲《惑星》で有名なホルストといった作曲家たち。

そして、そのホルストの盟友でもあり、ともに英国民謡の研究を通して自国の音楽遺産を作品にも活かしたのが、レイフ・ヴォーン・ウィリアムズ(1872～1958)。9つの優れた交響曲をはじめ、国民的な巨匠として広く愛された存在です。

今回の定期演奏会ではまず、このヴォーン・ウィリアムズ(で名字です)の人気作、古いイングランド民謡を題材にした《グリーンズスリーブス》による幻想曲(1908年)をお楽しみいただきます。これは、シェイクスピア原作のオペラ《恋するサー・ジョン》間奏曲から、グリーヴスの編曲(名前と作品名が似ていてややこしいですね)で有名となりました。愛する人の緑の袖……その色に寄せて歌われる心。シンプルだからこそ沁みる色、があります。

### ◆イギリスの傑作チェロ協奏曲、その憂いと情熱の輝き!

先にご紹介したエルガー——英国を代表する作曲家となった彼が、晩年に発表したチェロ協奏曲(1919年)は、今でも世界中で絶えず演奏され続けている人気作。しかし、これに負けないイギリス発の傑作チェロ・コンチェルトはまだまだあります。

20世紀最大のオペラ作曲家、ブリテンが、現代チェロ界の巨人・ロストロポーヴィチのために書いた《チェロ交響曲》(1963年)は、協奏曲と交響曲の融合した忘れがたい作品。そして、それに先立つ傑作が(ブリテンと並んで)国際的に名声を博した巨匠ウィリアム・ウォルトン(1902～83)のチェロ協奏曲(1955～56年)です。特に近年いよいよ世界の俊英たちによって演奏・録音されるようになってきました。次回定期でも、若くして峻烈な才能がほとばしる上野通明さんをソロにお迎えして聴けるとは、まことに楽しみなチャンスです!

ウォルトンは、2つの交響曲やカンタータ《バルシャザールの饗宴》をはじめ、残された作品は傑作ばかり。緻密な構築力がひらく彼の音世界には、大胆なハーモニーと冴えたりリズム感、鋭さと深さを兼ねそなえた詩情が、匠の筆致をもって響きます。

彼は、若い頃にヴァイオリン協奏曲を作曲して高く評価されたのに続いて、名奏者ハイフェッツのために(苦心惨憺の末に)ヴァイオリン協奏曲を作曲、こちらも大成功を収めました。そして(ハイフェッツの共演者でもある)名チェリスト・ピアティゴルスキーも新作を委嘱し、チェロ協奏曲が書かれることになりました。

冒頭楽章から、円熟のペンは冴えます。時を柔らかく刻むリズムの中から、内省的なチェロ独奏が語り出す、息も長いメロディ……その精緻な、耳に残るリズムを持った音はこびりは印象的です。揺れるハーモニーからにじみ出す(深くも深い)色彩感

は、やがてメランコリックな色と、情熱的な輝きとが融合し……。転じて、第2楽章はいよいよ色の扱いも見事で才気煥発なスケルツォ。そしてフィナーレは《主題と即興》と題された、これまた巧みな楽章。重ねられてゆく即興的な変奏のうち、第2・4変奏として長く技巧的なチェロ独奏をはさみ（作曲家いわく「これはカデンツァではない」）、回想的なエピソードへと静かに消えてゆきます。その深い余韻は永い感銘を残すことでしょう。

ご興味あるかたは、ウォルトン評伝でも古典となったM・ケネディ『ウォルトンの肖像』（Michael Kennedy "Portrait of Walton" [Clarendon Press, 1998]）には、現代音楽の先鋭に背を向けていたウォルトンと、彼を批判する評論家たちとの激しいやりとりなど、当時の音楽界の空気も含めて描かれているほか、最新の研究成果は（ウォルトン校訂版全集の編者序文を集成した、便利な便覧でもある）D・ロイド＝ジョーンズ編『ウィリアム・ウォルトン読本：その作品の創作・演奏・出版』（Ed. by David Lloyd-Jones "The William Walton Reader : The Genesis, Performance, and Publication of his works" [Oxford University Press, 2018]）にも詳しく書かれています。

## ◆燃える焔、空の深い青、萌える緑の昂揚……《色彩交響曲》の世界へ！

そして、次回定期の後半でお聴きいただくのは、アーサー・ブリス（1891～1975）の《色彩交響曲》（1921～21年／32年改訂）です。

ブリスといえば、バレエ愛好家の皆さんには、英国バレエの先駆者ド・ヴァロワが振り付けたバレエ《チェックメイト（王手詰め）》（1937年）の音楽でお馴染みかも知れませんが（日本では小林紀子バレエ・シアターがレパートリーに入れて好評を博してきました）。

バレエ音楽をはじめ、ブリスは劇的な音楽にとりわけ優れた才能をみせた作曲家でした。明快な躍動感やロマンティックな歌心をもったその音楽は、20世紀音楽の先鋭とは背を向けたもの。第1次世界大戦の深い傷を反映した合唱交響曲《朝の英雄たち》などの意欲作を経て、晩年は埋もれ気味になりますが、大御所としての存在感は大きなものでした。

そのブリス、デビュー期はむしろ奇抜な作品で注目を集めた人でした。——興行師ディアギレフが率いるバレエ・リュス（ロシア・バレエ団）のロンドン公演で、ストラヴィンスキーなど最新の音楽に触れたイギリスの若い作曲家たちは、その斬新で複雑なリズム感や鮮やかな色彩の音楽に衝撃を受けます。そのひとりがブリスだったので。

斬新な室内楽などで注目を集めたブリスは、巨匠エルガーの後押しもあって、大作発表の場を得ます。交響曲を書き始めますが、劇的ならぬ純音楽に靈感が湧かず、悶々としているうちに、ふと目にした本からヒントを得て、色彩の持つ象徴的な意味、を交響曲の各楽章に投影してみよう……と思いつきます。

そうして生まれたのが、次回定期でお聞きいただく《色彩交響曲》。イギリス音楽独特の色調のみならず、ロシア音楽から吸収した色彩感も混じって、独創的な音世界が広がる、魅力的なシンフォニーです。

全4楽章には〈紫〉〈赤〉〈青〉〈緑〉とタイトルがつけられていますが、ブリスが後に述べた解説などから補足しておく……第1楽章は「アメジスト、深い紫色、葬送のような、宗教的な、あるいは教会的な色合い」。エネルギー感ある第2楽章は「ルビー、ほんとうの緋色、燃えさかる焔の色」。緩徐楽章にあたる第3楽章は「サファイア、ピカソの青、深海、空、忠誠心、メランコリー」。そしてフィナーレは「エメラルド、希望、若さ、喜び、春、勝利」の色であり、「春の緑が、黄緑を経て徐々に深みを増し、深緑へと変化してゆく」。シェーンベルクを思わせる神秘的な冒頭から、フーガが展開されてゆき、凄まじい昂揚が燃え上がる……という尖りぶり。聴いていると分かりにくいですが、楽譜をみると全楽章それぞれ明快ながら変拍子も多用される本作、奏者2名を要するティンパニの乱れ打ちをはじめ、この色彩のスケールは見事！

予習されるなら、《色彩交響曲》の録音各種はもちろん、ブリスが尖っていた頃の初期作品集（ナッシュ・アンサンブル [Hyperion]）をお聴きいただくと、理解の解像度が高くなるかと。また、初演時の批評など作品の背景も簡明に知れる入門書、J・サグデン『ブリス』（John Sugden "Bliss [The Illustrated Lives of the Great Composers]" [Omnibus Press, 1997]）をはじめ、最新の評伝であるP・スパイサー『サー・アーサー・ブリス：群れから際だって』（Paul Spice "Sir Arthur Bliss : Standing out from the Crowd" [The Crowood Press, 2023]）や論文集など近刊もいくつか。なにより、次回定期をお聴きいただいて、作品を実感されるのが一番。暑い日が続きますが、またこのホールでお会いいたしましょう！

### やまの たけひろ 山野雄大

ライター [音楽・舞踊評論]。『音楽の友』『バンドジャーナル』など雑誌・新聞への寄稿をはじめ、NHK・FM「オペラ・ファンタスティカ」他ラジオ出演も。第一生命ホールでのコンサートシリーズ《雄大と行く 昼の音楽さんぽ》ナビゲーターを務めたほか、CD解説、オーケストラやバレエ公演の解説、歌詞対訳など多数。朝日カルチャーセンター新宿教室でバレエ音楽講座を開講中。

Profile

